



私の若かった頃の思い出

萱野 暁明

私が20代だったころを思い出すと、K大の医学部大学院博士課程修了直後の経験が最も強く印象に残っている。その1年に学位論文の仕上げ（当時は第一著者の論文1報で学位申請ができたが、それがなかなか困難であった）、結婚、就職（仮採用）、公務員1種試験、留学と4つのことが集中し、今思い出しても大変な1987年であった。各方面にご迷惑をかけながら、シカゴ行きのJALに身重の家内と共に乗り込んだのは、12月21日のことであった。よく若い時の苦労は買ってでもしろ、と言う話を聞くが、そんな話なんか思い出したくない心境であった。それくらい追い詰められた環境であった。

JAL便は朝早くシカゴに到着する。オヘア空港へはS先生（現神戸大学教授）が空港待合い室まで迎えに来て下さった。家内をS先生の部屋に置いたまま、S先生と共にシカゴ大学の研究室に早速出向いた。待っていたのは、ボスであるB准教授であり、すぐにcDNAライブラリーのラムダファージのタイターチェックをしろ、と命ぜられた。その日は寒天プレートを作り、タイターチェックを行い、S先生の部屋に戻った。新しいアパートが見つかるまで、S先生の部屋に居候した。これが、留学初日の状況である。なぜ、こういう状況を迎えたのか、について時間を追って整理し、今、それなりに落ち着いた定職につき、デスクワークとはいえ、研究職を続けている我が身を振り返り、若い人々の参考になればと考える。

私の今までのキャリアパスを考えると、大きく3つの展開が考えられる。

- 1) 大学院修士課程からポスドクまで.....微生物・動物の分子生物学
- 2) 農業生物資源研究所における研究 植物の分子生物学
- 3) 農業生物資源研究所の企画部門.....知的財産関連

上記の1) から2) への転機、2) から3) への転機にはそれぞれ理由があり、私なりに決断を迫られた。2) から3) への転機は勤務先の人事異動がきっかけであった。

私が高校生のころの夢は、K大学の理学部・大学院に進学し、生化学の研究を行い、大学の教官になることであった。それなりに受験勉強に励んだつもりであったが、

思うように成績は伸びず、地元の大学であるO大学薬学部に進学した。薬学部では学部卒で就職する傾向が強く、大学院進学での競争相手が少なく、勉強のできない私にとって有利だと考えた。

大学学部の入試では失敗した私であったが、大学院進学では希望通りK大学大学院を目指した。しかしながら、研究室配属となった4年生になって行っていたマキシマム・ギルバート法（DNAのシーケンシングの技法、今では歴史的方法となった）の実験がうまくいかず、「もう少しデータが出てから他の研究室に進学したら」、という指導教授の助言に従うしかなかった。当時の研究室的スタッフは皆さん若く、しかも大変優秀な方々であった。教授・助教授・助手の先生の皆さんT大学大学院修了後、米国でポスドクを経験後、赴任なさった経験をお持ちであった。若い私にとっては、大変インパクトが強く、そういう道を目指すべきであると確信した。一方、自分にそれだけの実力があるのかな、とも不安であった。

無事修士論文をまとめ、博士課程に進学することになった。修士課程の指導教授のご意向に反し（1週間ほど、口も聞いてくれなかった）、K大学の医学研究科（医化学第2講座）の博士課程に進学した。ちょうど父が定年退職し、退職金の一部が初めて下宿生活を始めるための資金となった。父の援助に関し、今でも大変感謝している。医化学第2講座では、想像を絶するハードワークが要求された。1日14～15時間、週末ではなく、休めるのはお盆と正月のみであった。それも、帰省するだけの時間であった。

そのためか、博士課程1年が終了するころ、風邪をこじらせK大学病院第2内科を受診したところ、ケトアシドーシスを起こしているので、すぐに入院するようドクターに言われた。やっと休みが取れると正直喜んだ。病名は糖尿病、しかもかなり重症とのことであった。1週間は病室にいたが、インスリンの自己注射を習い、2週間目からは病院から研究室に通うことになり、3食とも病室で栄養管理された食事を取るようになった。実験の方はペースを落として始めた。都合4週間入院したが、その間に内科のドクターと知り合いになり、ドクターの分子生物学の実験をお手伝いすることとなった。

災い転じて福となる、が如く、内科に入院したことが

転機となり、3 回生のころにはシカゴ大学への留学（糖尿病の分子生物学的研究）の話が内科の方で内々に進められていたようだった。そのころようやく学位論文のテーマを与えられ、実験に励んでいた。ペースは1日13時間の実験にセーブしていたが、cDNA ライブラリーを5 回も新たに作る必要があるという大仕事であった（当時はPCR法もなく、cDNAライブラリーを作り塩基配列を決定するだけで論文になる時代であった）。

博士課程の4 年間が瞬く間に終わったが、学位論文はまだであった。論文を出せるか否かはすべて主任教授のご都合で決まる。院生の仕事など後回しで、研究室全体の仕事が優先され（当時はNatureを毎年5報は出していたように記憶している）、Nature の論文作成となると、いわゆるデスマッチとなる。最低でも3 週間は論文の共著者は全員が主任教授のペースに合わせて論文作成をしなければならなかったため、いわゆる「待機」の状況となる。後で農水省の本省勤務となった1 年間にも経験したが、国会待機と同じ状況であった。いつでも呼び出しに応じられるように関係者全員が夜遅くまで（時には夜が明けるところまで）居残ることになる。

大学院を単位取得退学の後、第2 内科の援助で教務補佐員として雇われることになった。いわゆる留学待ちのポストである。その4ヶ月前に知人を介して今の妻に出会い、長距離恋愛の末、結婚することになった。2 人で区役所に出向いて婚姻届を出し、晴れて夫婦となった。結局、論文をまとめるのには、その後さらに数ヶ月を要した。

地方大学出身者の私には公務員I 種試験などは雲の上の話であったが、K 大出身の家内の影響で、この年国家公務員試験I 種（薬学）を受けてみた。一次試験のマークシート（共通並びに薬学専門）は完全なる敗北であった。まるでわからない問題がたくさんあった。やはり、無理だったと思った。6 年前に薬剤師試験を受けた時に一夜漬けた知識がまったく役に立たなかった。しかしながら、なぜか合格通知が来た。ほとんど奇跡であった。二次試験は記述式のため、大学院生を長くやっているおかげで比較的順調に答案を書くことができた。

そのころ、城山三郎の「官僚たちの夏」を興味深く読

んだ。自分も国家公務員になって国のために働く道もあるのだ、と強く感じた。大学の研究室にこもって、論文を書くことに終始するのではなく、日本全体のため、自分の能力を生かすことができるのではないかと希望を抱いた。その後、厚生省本省を訪れると、大学院経験者は行政に来ると損をする、と言われた。後でわかったことであるが、大学院6年間も行政経験に換算すると2年になり、4年間も年次が遅い人と同様の扱いになるそうだ。そのため、研究所行きを勧められた。

結局、公務員の名簿提示を2 年間延期し、予定通り留学する道を選んだ。米国では医学分野の研究においては、PhD もMD と同様の待遇であるが、当時の日本医学界ではPhD では十分な活躍の場がなかった。そのため、農水省の研究所を志望し、現在の研究所に採用されたのである。その時々での選択が自分に取って最高のものであったか否かはわからないが、自分なりに悩み決断を下したのであって、いまさら後悔する必要はないと最近考えるようになった。

（独）産業技術総合研究所・能力開発部門人材開発企画室が発行しているドクターズイノベーションというメールマガジンが大変有効であるので下記にウェブサイトを紹介したい。

<http://unit.aist.go.jp/humanres/ci/phd-career/index.html>

また、名古屋大学産学連携推進本部でもポスドク対応のキャリアパス事業も行っている。ウェブサイトを下記に紹介しておく。

<http://suishin.jimu.nagoya-u.ac.jp/kyaria.html>

このように現在ではポスドクに対して、政府が対応を始めた。それでも十分ではないようである。進路については、さまざまな局面において、選択を迫られる場合が多いと思う。

しかし、若い人々には無限の可能性があり、さまざまな可能性の中から一つだけを選ぶことは、それ以外の可能性を捨てることになる。私にも、可能性があったが、若い時に選んだ選択肢の中の一つの道を歩んできた。最後に重ねて申し上げる。

「若い人には、無限の可能性がある！」